

## 近世における都市－農村・日本－世界の文化的交差 ——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——

遠藤 薫

### 1. はじめに

現代のカワイイ文化を代表するものの一つとして、「猫」ブームがあげられる。報道<sup>1)</sup>によれば、2015年1年間の猫の経済効果は2兆3千億円に達し、ペットとしての飼育数も犬を超える勢いという。Googleトレンドでネット上での検索数を見ても（図1）、2013年ごろから犬を圧倒する伸びである。

なぜ「猫」の人气がいま急上昇しているのか？

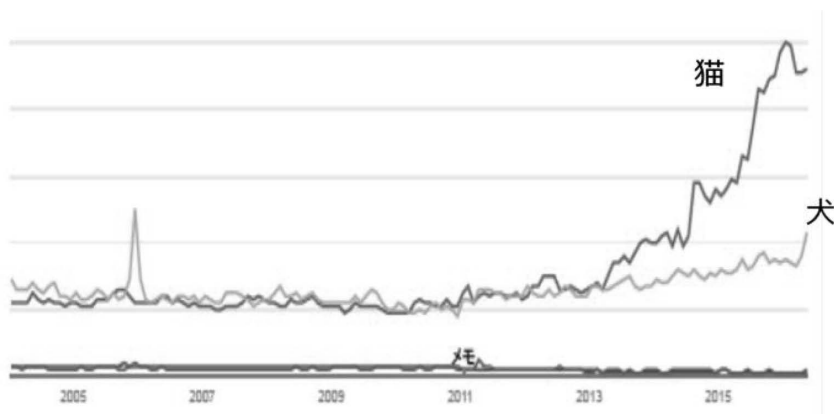


図1 Google Trendによる「猫」と「犬」の検索数比較（日本、2016.5.8時点）

1) 毎日新聞（2016年2月23日）「ネコノミクス経済効果2兆円 猫のまち尾道盛り上がり」

歴史をふりかえるならば、日本においては、猫は土着の生物というよりも、外来動物であり、一般家庭でも飼育されるようになったのは、近世以降と考えられている。社会における残余的現象とも見なされがちな猫の家畜化、愛玩動物化は、社会変動のいかなる様相を表徴しているのか。その背後には、世界と日本、都市と文化の相互交渉の様態が透けて見える。

本稿では、「江戸期の猫ブーム」を例として、海外と日本、都市部と農村部との文化的交錯、社会変動と、猫の社会的ポジショニングの変化との関係を検討する。具体的に検討することとする。

## 2. カワイイ猫前史

### 2.1 猫の渡来——土着の猫はいなかったのか

日本において、猫は海外から渡来した種と考えられており、またその渡来時期は、これまで、奈良・平安以降のことと論ずる人が多い。

もっとも、この通説に異議を唱える研究者もいる。

谷川健一は、「「猫」と呼ばれている山梨県黒駒村出土の土偶」(図1)について、次のように述べている。

この土偶は、猫の顔と人間の身体をもつ土偶であるようでもある。猫の顔と人の顔とが二重映しになっているようにもみえる。眼はつりあがり、兔唇のように唇は切れている。貴婦人のように肩を露わにし、しなやかな腕をまげて三本指の手を胸においている。猫が人間の主人公であることを主張するかのようなこの土偶には、つよい動物磁気がみなぎっている。猫族の特性を抽出したように無気味な沈黙が、この土偶を支配している。

妖しい牽引力、それを魔と呼ぶならば、縄文中期の人たちは、この土偶にそれを感じたらしいことが、おぼろげに感知されるが、なぜ人間とも猫ともまぎらわしい土偶をつくる必要があったのか。猫族に人間以上

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——のすぐれた能力をみとめ、その魔力を神として崇拜するまでにいたったのか。もちろんその答えはない。

しかし、この土偶のもつ神秘的な魔力を否定することはむずかしい。この「猫」にしるマムシにしる、山岳地帯に多い夜行性の兇悪な動物たちに、当時の人たちが畏怖の念をいだき、それを造形した心理をよみとることは、けっしてむずかしくない。(p.42-3)<sup>2)</sup>

また、長谷川・他(2011)は、「日本各地の縄文時代草創期より晩期までの遺跡よりオオヤマネコの遺物が断片的であるがかなり発掘されている。」(長谷川・他、2011「日本における後期更新世～前期完新世産のオオヤマネコLynxについて」『群馬県立自然史博物館研究報告(15):43-80,2011』)と論じている。

弥生時代に関する近年の発見としては、「勝本町のカラカミ遺跡で、日本最古のイエネコの骨が発見されたことが確実にになった。2011年の壱岐市による発掘調査で約2千年前の弥生時代後期半ば(紀元1～3世紀)の遺構から発見された1882点のうち、723点の分析が奈良文化財研究所で行われ、このうちの1点がイエネコの橈骨(とうこつ=前腕の骨)であることが判明した」(壱岐新聞 2014.9.5)との発表もある。

にもかかわらず、歴史上、猫のイメージは、土着性よりも、舶来文化への想像力をかき立てる傾向がある。それが犬と大きく異なる特長である。

## 2.2 平安絵巻に描かれた唐猫——高価な私財としての猫

日本の文学や芸術に、猫は奈良、平安の頃から登場する。清少納言の『枕草子』や藤原実資『小右記』には、一条天皇の猫への溺愛が描かれているし、『更級日記』には、乳母を失って悲しむ姉妹の心を、迷い込んできた愛らしい猫が癒す。また猫を描いた最も古い絵は、『信貴山縁起絵巻』(平安末期)の中に現れる尼公の飼い猫であるという。その他、『鳥獣戯画』や『石川寺

---

2) 谷川健一『魔の系譜』講談社

縁起絵巻』などにも猫が描かれている。とくに紫式部『源氏物語』「若菜」では、女三の宮の小さな唐猫が駆け回って御簾を揺らしてしまったことで、柏木が女三の宮に焦がれるようになる印象的な場面がある。このエピソードは、後世の人びとにも大きな影響を与えた（後述）。



図2 『源氏物語』若菜の巻（出典：萩生天泉編著1932『伊都伎鳥』画報社, 国立国会図書館蔵）

『鳥獸戯画』以外の絵巻に登場する猫たちは、すべて貴顕の飼い猫であり、愛らしい首輪や繋ぎ紐をつけている。それらの猫はしばしば、「唐猫」とも呼ばれ、中国から輸入されたそもそものが「愛玩用商品」であったことがうかがわれる。また、現代では、猫に繋ぎ紐をつける習慣はないにもかかわらず、当時は繋ぎ紐がつけられているところには、現代における猫とは異なる社会的位置づけがなされていたと推測される。端的に言えば、猫が飼い主の社会的地位を表す高額的所有物であったということであり、したがって、猫の紛失（逃走）を避けるための繋ぎ紐や、猫の所有者を明示する首輪は必須であったと考えられる。

反面、猫よりも頻繁に描かれる犬は、野犬も多く、飼い犬であってもむしろ首輪や繋ぎ紐がない場合が多い。

### 2.3 禅宗と猫

絵巻に描かれた唐猫たちの多くは愛玩用の飼い猫である。しかし、そもそも中国で（あるいは世界で）猫が家畜化されたのは、猫が人間の生産活動に有用な役割を果たすからだった。すなわち、猫は小動物を食糧とし、これを捕獲する能力に長けていた。一方、人間にとって、収穫した農産物や水産物

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——を食い荒らす鼠の駆除は重要であった。鼠害への対抗策として、古くから猫は家畜化されたのである。

たとえば中国北宋の詩人黄山谷（黄庭堅, 1045-1105）に、「猫を乞う」（『山谷外集』巻七）という詩がある。

秋来鼠輩（そはい） 猫の死せるを欺（あなど）り  
甕を窺い盆を翻（ひるがえ）し夜眠を攪（みだ）す  
聞くならく 狸奴 数子を将（あ）ゆと  
魚を買い柳に穿（うが）ちて銜蟬（かんせん）を聘（へい）ぜん<sup>3)</sup>

一方、南宋の詩人陸游（1125-1210）も、「猫を贈らる」（『劔南詩稿』巻十五『陸澣集』第一冊）という猫の詩を書いている。

塩を裏（つつ）みて小狸奴を迎え得たり 尽く山房の万卷の書を護（まも）る  
慚愧す、家貧しくして策勲薄く 寒きときに甕（せん）に坐すことなく  
食に魚なきを

黄山谷は、農産物を狙う鼠を駆除するための猫をうたっているが、陸游は、書物を鼠害から護る猫をうたっている。ただし、いずれの詩からも、単に「有用」であるというだけでない、猫への愛情が感じられる。猫は確かに、その有用性によって家で飼われるようになったかもしれないが、同時に、その姿形の美しさ、愛らしさによっても人びとの心を捉えていた。この二面性も、猫の特徴である。

鎌倉・室町期には、日本にも書籍を鼠害から守るために、猫が輸入された。そのため、禅僧は猫を飼っていることが多く、禅画にしばしば猫が使わ

3) 今村与志雄, 1986, 『猫談義 今と昔』東方書店, p.12-6を参照

れる。また、禪の心を表すためにも猫が描かれた。

例えば、蔵三が描いた「牡丹猫図」(室町時代 16世紀)は、「白い牡丹の花の下、猫がみつめるのは一匹の蝶。墨のぼかしと細かい描線で、猫の柔らかい毛並みが見事に表現されている。大きめの寸法から、もともと禅寺で用いる座屏(衝立)に貼られていた可能性がある」(根津美術館による解説)という美しい絵である。

この「猫」「牡丹」「蝶」という組み合わせ(図3)は、猫を描くときしばしば用いられる。その理由については、中国では、「〈猫と蝶〉を描いた図柄のように、「猫」「蝶」の中国語での発音が、非常な長寿を意味する「耄耋(mao die)」の語と共通であることから、やはり「長寿」を意味するなど、言祝ぎの意味を謎語(一種の語呂合わせ)として楽しむことから、日本でもそれが取り入れられたと今橋(2004:183)は説明している。また、明代の禅僧語録『水月斎指月録』にある「牡丹花下睡猫児」という禅問答の一節によるとの解釈もある(後述)。



図3 花蝶猫図(南啓宇 朝鮮時代(一部)、国立博物館蔵)

## 2.4 「猫又」の登場

猫は有用であり、愛らしく、哲学的であり、かつ、富貴のシンボルでもあった。「猫」は実に多義的な存在なのである。

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——

さらに猫は「怪しい・妖しい」存在でもあった。中国では「猫鬼」「金花猫」などの妖怪が知られている。日本でも、『今昔物語』や『古今著聞集』に猫の妖怪が現れる。

最も有名なのは、兼好法師『徒然草』に書かれている、「猫又」という猫の妖怪（の風説）だろう。

『徒然草』第八九段は、次のようである。

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と、人の言ひけるに、  
「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またに成りて、人と  
る事はあなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌し  
ける法師の、行願寺の辺にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は、心す  
べきことにこそと思ひける比しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、  
ただひとり帰りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまた  
ず足許へふと寄り来て、やがてかきつくまに、頸のほどを食はんとす。  
胆心も失せて、防がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転び入り  
て、「助けよや、猫また、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして  
走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「かは如何に」とて、  
川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇・小箱など懐に持ち  
たりけるも、水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふはふ家  
に入りにけり。

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

要約すれば、「最近山奥に猫又という怪物が出て人を襲うという噂が流れているが、そのあたりの猫も年齢を重ねれば猫又になって人を襲うという。ある僧が深夜帰宅しようとしたところ、小川のほとりで猫又らしきものに襲われた。恐怖に駆られて大騒ぎした僧は、近くにいた人に助けられたが、よく見れば自分の飼ひ犬が飼ひ主を迎えようと抱きついただけだった」ということになる。

この小話を、日本における当時の現実から理解するならば、

- (1) 平安から鎌倉にかけて、日本国内でも猫が増殖していった
- (2) その中から、飼い主から逃げたり、あるいは棄てられたりして野良化、野生化するものも増えてきた
- (3) 野生化した猫は、食料を求めて、人を襲うものも現れた
- (4) これらの野生猫を「猫又」という妖物として虚構化した

という流れではなかったかと考えられる。

すなわち、この小話の背景として、「猫」の一般化、野良化（再自然化）などがこの時期起こったのではないかと考えられる。反対に、この小話でも、犬は「従順な家畜」として描かれていることに注目したい。

その後も、猫の怪談に比べて、犬の怪談は少ない。

### 3. なぜ江戸期に猫はブーム化したか ——公共財化した猫

#### 3.1 徳川開府と猫

1603年、徳川家康が征夷大将軍に任じられ、江戸に武家政権を開いた。

家康は1616年に亡くなるが、翌1617年、朝廷から東照大権現の神号と正一位の位階を与えられ、日光東照宮に改葬されたことは周知である。この回廊には、左甚五郎作と伝えられる「眠り猫」の木彫がある。「眠り猫」の含意については諸説あるが、「牡丹の下で眠っている猫」という構図は、先にも挙げた「牡丹花下睡猫児」の禅語を想起させずにはおかない。この禅語の解釈として、藤原(2014:71)には『禅林方語』に「牡丹花下睡猫児、心在舞蝶」とでて、通常は「心在舞蝶」を略した欠後語（一種の謎語）として用いられ、「牡丹花の下で眠る猫。猫は豪華な牡丹花を愛でているわけではない。その真意は、花をめぎして飛んでくる蝶々にある」という意味であり、「真意は他にあり」といった意味でも用いられる。また、うたた寝と蝶の組合せから、『莊子』の「胡蝶の夢」が連想されることも多かった」と説明されている。ただし、ここには詳述しないが、その他にも様々な解釈がある。



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——

また大阪冬の陣で消失し、徳川幕府によって再建された四天王寺太子殿(聖霊院)にも猫の門と呼ばれる猫の彫刻を施した門がある。この猫も牡丹と共に眠っている。「眠り猫」の寓意についても諸説あり、「猫も眠るほどの平和」を意味しているとも、「猫は眠っているように見えるが、わずかな変化でもあれば直ちに目を覚ます緊張感を備えている」ととくものもある。いずれにせよ、戦国期を終えて、平和の時代を祈念する意味がそこには込められているのだろう。



図4 四天王寺太子殿猫の門  
(2017.3.14 遠藤撮影)



図5 日光東照宮奥社唐門「眠り猫」  
(1998.9.28 遠藤撮影)

### 3.2 公共財化する猫

このように、猫は確かに古くから日本社会において人気のある動物であった。とはいえ、猫は希少な外来動物であり、現代のように日常的、大衆的な愛玩動物ではなかった。猫が今日のように大衆的な「カワイイ動物」化したのは、江戸中期以降である。なぜこの時期、猫の「カワイイ動物」化が進んだのか。この問いを、「猫」の特性と社会・技術史的な観点から考えてみたい。

いまでも読み継がれている「御伽草子」のなかに、「猫のそうし」という物語がある。話は、慶長7年に、京都の町では猫を放し飼いにしなければならない、また、猫を売買してはならない、というお触れがでるところから始まる。市古の注(1958)によれば、これは実際にあったお触れだという。現代人からみると、いささか奇異な触れ書きだが、上田穰(2003)によれば、当時、

穀物に害をなす鼠の駆除には猫がもっとも有用な道具であった。戦国時代が終わると、都市化が進み、多くの人びとが集住するようになると、鼠の害はいっそう深刻になった。ところが希少性の高かった猫は、一部の者たちに独占されており、その売買や貸借が大きな利益に繋がっていた。これを問題視した施政者は、猫を放し飼いにするよう命ずることで、鼠の害をあまねく防ごうとしたのだと解釈している。

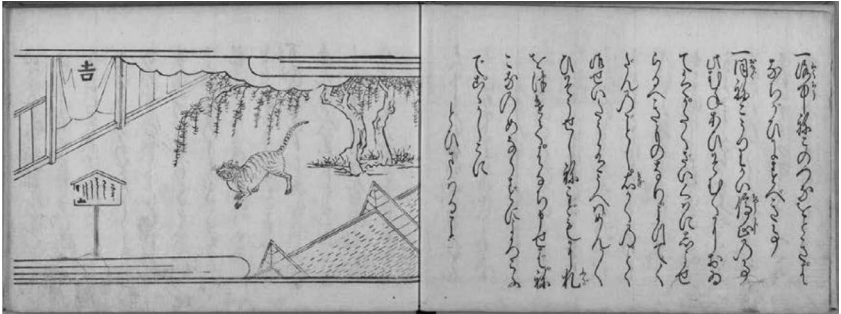


図6 「猫のさうし」(『御伽草子』第十六冊 国立国会図書館蔵)の挿絵

いいかえれば、高価な私財であった「猫」を公共財とすることで、公共空間としての都市全体の秩序を高めようとしたのである。同様の法令は、他の地域でもだされたという。そして実際、今日、「猫は首輪や鎖でつながない」という飼いは、全く当たり前のものとなっている。

この結果、猫たちは自由に食料を調達し、自由に繁殖するようになった。猫は貴顕の愛玩動物ではなく、庶民の日常生活の一部となったのである。

徳川5代将軍綱吉(在任:1680-1709)は、1685年の「将軍御成の道では犬・猫を繋がずに放しておいて構わない」というお触れをはじめとする「生類憐れみの令」を繰り返しだしているが、これも、上記流れの中で理解する必要があるかもしれない。

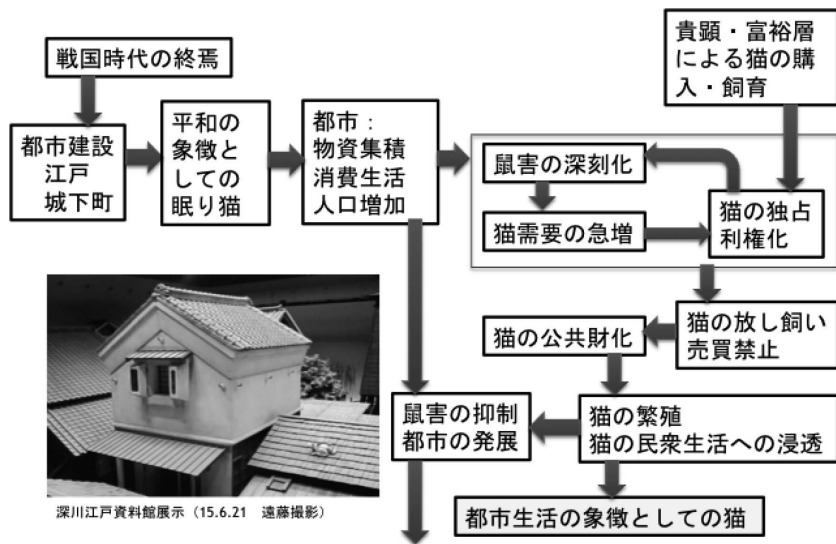


図7 戦国期から江戸期に至る猫の社会的位置づけの変化

## 4. メディア化する江戸の猫——猫絵の変遷

### 4.1 印刷技術の展開と猫たち

江戸期に入ると、15世紀にはじまるキリシタン本や嵯峨本などに見られる木版印刷技術の一般化が進む。これに伴って、安価な印刷物が大衆の娯楽商品として受容されるようになった。その代表的なものとして、「大津絵」がある。大津絵の発生は必ずしも明らかではないが、東海道の天津宿で売られた絵で、人びとは土産物として争って買い求めたという。大津絵が、その後、浮世絵へと発展していく。

大津絵は仏画や禅画から派生したとも言われているが、その趣は飄々としており、その姿はユーモラスではあるが、今日的な猫の可愛さとはやや異なる表現である。禅画的猫の表現は、江戸後期の禅僧、仙崖義梵（1750-1811）による猫絵にも受け継がれている。

また、鳥山石燕『画図百鬼夜行』の一枚である「猫また」や与謝蕪村「柳

原家の化け猫」はまさに「化け猫」であり、享和～文化年間に描かれたとされる葛飾北斎の「美人愛猫図」や窪俊満「春雨集」(享和～文化年間に描かれた「金沢文庫・称名寺の唐猫」も禅味と奇怪さを併せ持っている。



図8 大津絵「猫と鼠」<sup>4)</sup> 図9 鳥山石燕「猫また」<sup>5)</sup> 図10 与謝蕪村「榊原家の化け猫」<sup>6)</sup>

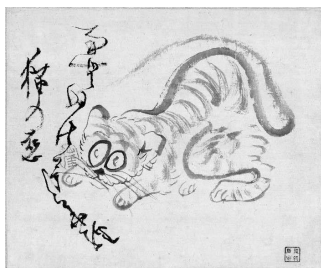


図11 仙崖義梵「ねこのこひ」(九州大学文学部所蔵(旧中山森彦コレクション))

## 4.2 吉原と猫

上代において、「愛らしい」猫は、貴顕、とくに高貴な女性たちの愛玩動物の特性であった。それが、江戸期になると、「猫」は「遊女」の別称とも

4) 山内金三郎, 1912, 『大津絵集』玉嶋館 国立国会図書館蔵

5) 『画図百鬼夜行』(安永5年(1776年)刊行)

6) 18世紀半ば

近世における都市－農村・日本－世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
された。小野武雄（1983：p.74）は、次のように書いている。

◎猫（金猫・銀猫・山猫）

これは岡場所における卑娼の異称で、客と同寝するのが商売であった  
ので、寝子（ねこ）だという処から来た名である。

松が鮓 一分がべろり猫が食ひ 本所名物松が鮓

金の猫 一時一分目が変り 揚代一切一分也

金と銀の猫……本所一つ目弁天前の金猫銀猫の事。私娼。一切（ひときり）  
一分の価であった。売淫の値段は、普通には、金猫は一分、銀猫は二朱であったという。

江戸期の遊女は、花魁と呼ばれるような高級遊女から悲惨な生活を強いられた下層のものまでさまざまであった。江戸が大都市化するにつれ、こうした女性たちも増えていき、一部は現在の芸能人のような人気を集め、その格好の表徴が「愛らしい猫」でもあった。

例えば、馬場文耕<sup>7)</sup>の『江戸著聞集（近世江都著聞集）』の巻五「三浦遊女薄雲が伝」には、次のような記述がある。

晋其角句に、

京町の猫通ひけり揚屋町

此句は、春の句にて、猫通ふとは申也、（猫「サカルコガル」をだ巻の初春の季に入りてあるなり。京町の猫とは、遊女を猫に見立たる姿也といふ。斯（かく）有ると聞へけれども、今其角流の俳諧にては、人を畜類鳥類にくらぶるは正風にあらず、とて致さず。此句は、元禄の頃、太夫格子の京町三浦の傾城、揚屋入の時は、禿に猫を抱させて、思ひ／＼に首玉を付て、猫を寵愛しけり。すべての遊女、猫をもて遊び、道中に

7) 馬場文耕は、享保3年（1718年）に生まれ、宝暦8年（1759年）に没した。江戸時代中期の講釈師。金森騒動についての講談、著述により、処刑された。

持たせ、揚屋へ通ふを、風雅に云かなへたりし心なるべし<sup>8)</sup>

すなわち、其角<sup>9)</sup>の発句「京町の猫通ひけり揚屋町」が、「猫=遊女」という比喩によるものではなく、当時、遊女たちが愛らしく仕立てた猫をアクセサリのように連れ歩いた様子をうたったものだと指摘しているのである。

それに伴って、浮世絵も浮世絵に描かれる猫も、美女を引き立てる愛らしさの表現が多くなる。



図12 鳥居清信<sup>10)</sup>による  
江戸初期の浮世絵



図13 鳥居清長<sup>11)</sup>画「入浴」

美女と猫の姿を描くとき、その構図に、源氏物語「若菜」の女三の宮と唐

8) 馬場文耕(塚本哲三編集), 1927, 『窓のすさみ・武野俗謡・江戸著聞集』有朋堂

9) 宝井其角は、寛文元年(1661年)に生まれ、宝永4年(1707年)に没した、江戸時代前期の俳諧師、芭蕉門下。

10) 鳥居清信は寛文4年(1664年)に生まれ、享保14年(1729年)に没した、江戸時代中期の浮世絵師、鳥居派の祖。

11) 鳥居清長は、宝暦2年(1752年)に生まれ、文化12年(1815年)に没した、江戸時代の浮世絵師、鳥居派四代目



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——猫のエピソードを下敷きにするものが多いと指摘されている。例えば、図12に示した清信の絵も、美女の裾に絡みつく猫という典型的な構図となっている。2.2節にも簡単に紹介したこのエピソードは、愛らしい猫のいたずらが禁じられた恋の矢となる瞬間を捉えたもので、古典美とあやうい官能性の混濁が江戸人たちを惹きつけたのだろう。

またこの頃から、猫を主人公とした草子も現れてくる（図14）。



図14 朧月猫の嫁入p7（南仙笑楚満人，1806）国会図書館蔵

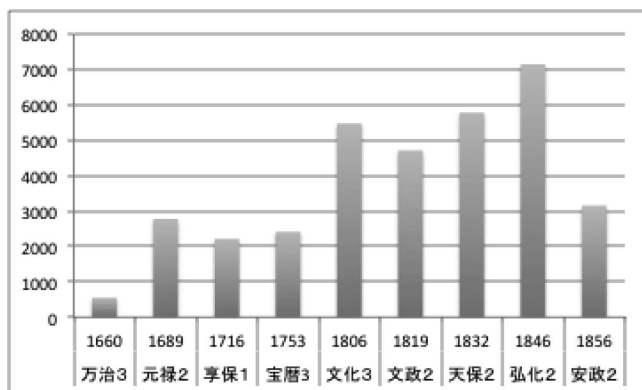


図15 吉原遊女の人数推移<sup>12)</sup>

12) データ出所：江戸東京博物館『「図表でみる江戸・東京の世界」』p.78より作図



図16 鳥居清長『化物世権鉢木』（『化物一代記』）

遊女の中には、花魁のように格の高いものから、安い出費で遊ぶことのできる茶屋女などもある。『武功年表』寛保三年癸亥（一七四三）四月閏の記事に「宮寺の地に、山猫となつけし茶屋女、所々に多かりし」ともある。

草子のなかの女たちはしばしば化け猫にも変身する。たとえば、鳥居清長も、『化物一代記』（図16）、『化物七段目』などの化け猫の草双紙も出版している。猫という存在には、「愛らしさ」と「怪しさ」の二面性が不可避なのだろう。

#### 4.4 メディア産業の発展と猫ブーム

江戸期の都市部消費産業の発展は、江戸期の猫ブームを支えたものだった。着物の文様などにも猫の意匠が流行したと、藤井（2010）は論じている。また、歌舞伎の世界でも、元禄の頃、若女形水木辰之助が江戸市村座で興行した「四季御所桜」で猫の所作を演じて大人気を博した、と『武功年表』に記載されている。なかでも出版産業の成長は、浮世絵や黄表紙などのポピュラーカルチャーの需要増大とシナジーの関係にあった。

美しい女たちと猫の姿態を描く浮世絵が増え、その描き方も、リアリティに満ちたものへと変化した。江戸後期、現代にも通じる「カワイイ」猫を描



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
いて大きな人気を博したのが、国芳に代表される猫絵描きたちであった。



図17 国芳「山海愛度図会 猫になりたい」嘉永5，国会図書館蔵



図18 「花盛土農工商」歌川国貞 国会図書館蔵

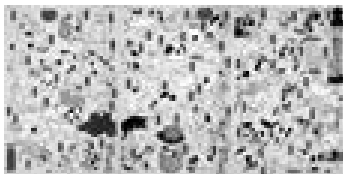


図19 国芳「其のまま地口 猫飼好五十三疋」嘉永元（1848）

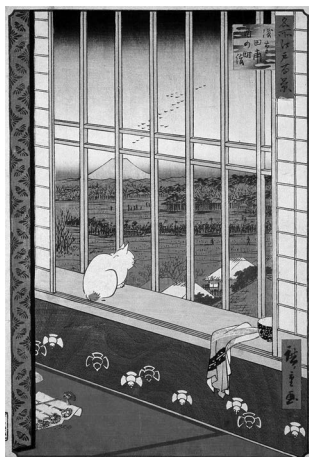


図20 名所江戸百景 浅草田甫西の町詣（広重）

#### 4.4 朧月 猫のさうし

国芳は、自ら、多くの猫を飼っていたとも伝えられ、リアルな猫の姿を浮世絵に表現し、人気を集めた。

なかでも猫をメインキャラクターとした山東京山作・歌川国芳画『朧月猫草紙』<sup>13)</sup> (図21) は、ベストセラーとなった。

現代語訳版の紹介によれば、「舞台は鎌倉。カツブシ問屋のメス猫おこまちゃんは、ある事件から、恋しいとらさんと駆け落ち。ところが、待っていたのは、山あり谷ありの数奇な運命だった…。物語を彩るのは、お姫様や奥

13) 山本平吉・出版、天保13-弘化3 [1842-1846]

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
 女中、彫物師や漁師、それに、立ちすぎるくらいキャラの立った大勢の猫たち。江戸時代の猫好きコンビがおくる、「メス猫おこまの一代記」である。

国芳は、それ以前にも、十返舎一九と組んで、『化皮太鼓伝 6巻』（図22）という草双紙を出版し、人気を博している。（こちらでも猫が活躍している）。この時期、人びとの識字率が高く、日常的娯楽として草双紙がもてはやされ、ベストセラー作家と人気イラストレーターを組み合わせ、大ヒットをもくろむ版元の戦略もあったことだろう。この流れに乗って、「猫」も人気のキャラクターとしての地位を獲得していった。



図21 『朧月 猫のさうし』（山東京山・国芳、天保13年（1842）-嘉永2年（1849））国会図書館蔵



図22 十返舎一九作・歌川国芳画『化皮太鼓伝 6巻』山口屋藤兵衛、天保4 [1833]（国立国会図書館蔵）

物語だけでなく、佚斎樗山 (1659 - 1741) 著の談義本『田舎莊子』(享保12年(1727年)刊)には、『猫の妙術』という一話が収められている。これは、古猫が語る剣術指南書である。

#### 4.5 江戸末期の招き猫ブーム

江戸末期、「猫」キャラクターは、さらに別のかたちでも江戸の人気を集めることになった。

「招き猫」である。

「招き猫」の由来について、よく知られた風説が、『藤岡屋日記』に書かれている。

##### 嘉永五子年春 浅草観音猫の由来

浅草随神門内三社権現鳥居際へ老女出で、今戸焼の猫をならべて商ふ、是を丸メ猫共、招キ猫共いふなり、是ハ娼家・茶屋、其外音曲の席等ハ余多の客を招き寄候とて、是を求メ信心致ス也、又頼母子・取退無尽等ハ壱人ニて丸メニ致候とて是を信じ、又公事出入・貸借等も此猫を信ズル時は勝利となりて丸メに致し、又々難病の者、此猫を求メ信心致し候時ハ、膝行ハ腰が立て親の敵を討、盲人ハ目が開き目明しといたし、又は脚気症等よいよいニて歩行自由ならざる者も、此猫を信ずるがさいご忽ち両足ぴんぴんと致し、余り退屈だから昼飯ニ小田原迄初鰯を喰ニ参り候との評判ニて、飛脚屋 京都へ三日限の早飛脚を頼まれ、余多の賃金を丸メとしたとの風聞、欲情の世界なれば、我も我もと福を招きて丸メ丸メ。

丸メに客も宝も招き猫

ただし、「招き猫」の由来については諸説ある。その社会的意味や神話構造については、遠藤 (2015) でもすでに考察しているが、詳しくは別項に譲る。

#### 4.6 化け猫騒動

本稿でもすでに繰り返し述べてきたが、「猫」は、「愛玩動物」の性格と「妖物」の性格が常に併存して語られ、草双紙などの物語にも語られてきた。

その延長線上にありつつ、同時にやや飛躍したものとして、「化け猫騒動」があげられる。「有馬の猫騒動」「佐賀の猫騒動」「岡崎の猫騒動」などは、「お家騒動」の物語と結びついて語られ、歌舞伎や講談にも仕立てられた。

これらについても、その社会的意味や神話構造については、遠藤（2015）でもすでに考察しているが、詳しくは別項に譲る。

#### 4.7 江戸期における「猫」の位置づけの変化

本章では、江戸以前から江戸後期に掛けての、社会のなかでの「猫」の位置づけをまとめたのが、図23である。要約すれば、時代の進行に伴って、猫のイメージは、世俗化、国内化、大衆化、遊戯化していったといえる。

江戸初期以前	江戸中期以降
輸入文化	日常風景（野良猫の増殖）
貴顕・富裕層の愛玩動物	遊女の愛玩動物 （大名から庶民まで）
鼠害防止のツール	鼠害防止のツール ⇒記号化
神／妖怪	流行神／怪談の風説
思想的象徴性	玩具化

世俗化／国内化／大衆化／遊戯化

図23 江戸期における「猫」の位置づけの変化

### 5. 在村技術の発展——養蚕神としての猫

#### 5.1 猫の絵を売る者たち

一方、江戸の町には、「猫絵売り」なるものが現れた。『武功年表』の明和

2年（1765年）の記事に、「曳尾庵云ふ、明和安永の頃、鼠除（よけ）猫の絵か、んとて市中を歩行きしは、常州の者にて名を雲友といふ（又、蜀山人の「一話一言」に、天明寛政の頃、白仙と云へるもの、年六十にちかき坊主也。出羽の秋田に猫の宮あり。願ひの事ありて猫と虎とを画きて、社に一枚づゝ奉納すといふ。自ら猫かきと称して、猫と虎とを画きて筆を持ちて都下をうかれ歩き、猫書かふ書かふと云ひし也。呼び入れて画かしむれば、僅かの価を取りて画く。その猫は鼠避けしといふ云々とあり。いづれか先なる未詳）」とある。ネズミよけの効能があると称する猫の絵を売り歩く僧侶らしきものがいたという風説である（詳細は省くが、宝暦13（1763）年、『風流猫画之物語』という草子も出版されている）。

その後猫絵売りは増えて、日常的な存在になったのだろうか。勝川春扇画『傾城客問答』（1820刊）にも「猫絵売り」の姿が描かれている（図24）。その近くには「半田稻荷」の効能を宣伝するものも描かれている。似たような位置づけであったのだろうか。

実は、猫絵で一世を風靡した国芳にも、「鼠よけの猫」という絵がある（図25）。暗闇で鼠が見たら本物の猫と間違えて逃げるかもしれない、リアルな猫である。あるいは、国芳の猫絵の流行には、こうした「猫絵うり」たちの存在も預かっていたのかもしれない。

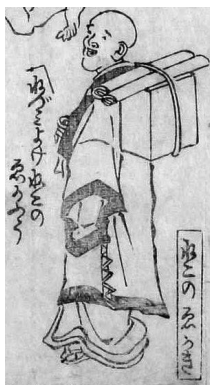


図24 猫絵売り（『傾城客問答』より、早稲田大学図書館蔵）

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——

「猫絵売り」について、藤原（2014）は「新田猫」との関係を示唆している。「新田猫」（図26）とは、岩松藩の歴代藩主が、地域の養蚕業者たちに、鼠よけの効能があるとして、猫の絵を描き与えたものである。（養蚕神としての猫絵の起原を中国に求める説もある。例えば、野村（2011）など）。



図25 国芳「鼠よけの猫」（国立博物館蔵）



図26 新田の猫絵  
（太田市立新田庄歴史資料館蔵）

## 5.2 生糸生産の展開

この背景には、江戸期からの養蚕業奨励の動きがある。佐々木(1983)などによれば、江戸期以前、日本では生糸の大部分を輸入に頼っていた。しかし、



生糸輸入は、日本から金・銀が大量に流出する事態を招いた。幕府は、1606年に白糸割符制、1648年には生糸の輸入高制限を行うなど、生糸貿易を制限するとともに、生糸の国内生産を奨励した。この流れの中で、西陣は原料糸を唐糸から和糸へ変えることになった。

養蚕業振興は、各藩や地域社会にとっても望ましいことであった。米の以外の商品作物生産は、課税されない財をもたらすからであった。また、江戸だけでなく、各地に形成された城下町は、都市的消費を促し、商品作物の需要を高めた。江戸後期になると、養蚕技術は高度なレベルに達し、明治以降、日本の主力輸出産業に成長した。

### 5.3 蚕神

養蚕農家では、蚕神を祀るのが常であった。

福島県相馬郡新地町の町史には、次のような記載がある。

十数年前まで山沿いの農家を中心に蚕を飼育し、それらの家では養蚕の守り神として蚕神を祀っていた。沢口ではトゥパロの「蚕」という石塔を蚕神として信仰している。春蚕を掃く前に、石塔が覆われている屋根に繭一〇個ぐらいつしたものをつけて豊作を祈り、ほかに村氏神の諏訪神社の境内にある蚕神の石塔にも参詣した。…(中略)…駒ヶ嶺の大槻神社は養蚕農家から尊崇されており、旧三月二十五日の春祭りには「オネコサマを借りる」と称して幣束をいただき、各家の蚕室に飾る。ネズミは養蚕の外敵であり、この幣束を置くとネズミの害を防除できるという」『新地町史』p.284-5

蚕神自体と「オネコサマ」の関係は微妙である。蚕神については、「(埼玉)県内に普通見られる蚕神像は女神で、桑の枝をもったものである」(『関東の民間信仰』p.243)との研究があり、実際に、養蚕錦絵などにも、壁に女神が祀られている様子が描かれている。「オネコサマ」は蚕神の神使という位



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
置づけなのか、あるいはもっと具体的に、鼠を獲ってくれる「猫」を入手で  
きない養蚕家たちのための代理品だったのだろうか。『関東の民間信仰』には、  
先に挙げた「新田の猫絵」についても次のように記述されている。

「八方にらみの猫」（万次郎の猫、新田の猫）という猫絵が、利根川をは  
さんだ埼玉・群馬両県の養蚕家、蚕種家に愛用された。時代は幕末から  
明治にかけてであったが、現在はほとんど姿を消している。養蚕期に蚕、  
繭を承の害から守るため繭を飼育した例は多い。蚕書の中にも、養蚕用  
具の一つに「猫」を取り上げたものもある。この万次郎の猫は上州新田  
郡世良田の徳川の新田公が描いたもので、蚕室の鼠除けとして群馬・埼  
玉両県の養蚕家に珍重された。『関東の民間信仰』p.244-5

#### 5.4 養蚕技術の研究

蚕技術の発展を媒介したのが、在村の知識人たちの書いた「農書」（農業  
生産技術のテキスト）であったと杉(2001)は指摘している。印刷技術の発展  
とともに、表1に示すように多くの農書が出版され、全国に普及した。農書  
が日本全体の農業技術の向上に大きく貢献したのである。

養蚕農書は、いうまでもなく、養蚕技術を詳細に論じ、説明したものであ  
るが、図27に示すように、その内容は、大きなイラストレーションによって  
わかりやすく書かれたものであった。また、イラストに登場するのは、美し  
い女たち。時に子どもたちである。実際に養蚕の作業に携わったのが女たち  
であることを示している（遠藤2017参照）。そしてその中には、しばしば猫  
が描かれた。鼠よけの猫が養蚕現場に不可欠な存在であったことを示す（伊  
藤2006）一方で、養蚕書に描かれるのは、「新田猫」より、ずっと日常的で、「カ  
ワイイ」猫の姿態である。この時期、猫には、鼠駆除も期待されていたのだ  
ろうが、同時に、家族の一員のような扱いも受けるようになっていたと推測  
される。

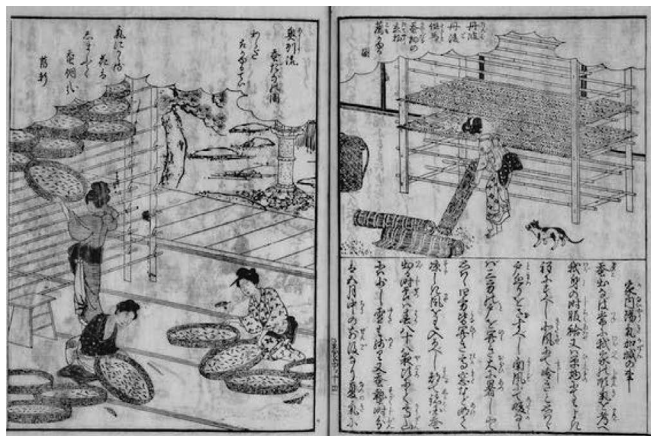


図27 養蚕秘録. 中巻 / 上垣守国 作; 西村中和, 速水春暁斎 画, p.17<sup>14)</sup>

表1 主な養蚕農書

1702 (元禄15)	日本初の養蚕書『蚕飼養法記』(野本道玄, 津軽藩)
1712 (正徳2)	『蚕養育手鑑』(馬場重久, 上野, 養蚕家・医師)
1757 (宝暦7)	『新選養蚕秘書』(塚田与右衛門, 塩尻, 養蚕家)
1794 (正徳2)	『養蚕須知』(吉田友直, 渋川)
1803 (享和3)	『養蚕秘録』(上垣守国, 但馬国)
1813 (文化10)	『養蚕絹飾』(成田重兵衛, 近江国)
1847 (弘化4)	『養蚕教弘録』(清水金左衛門, 塩尻)
1849 (正徳2)	『蚕当計秘訣』(中村善右衛門, 福島)

## 6. 「子供の誕生」と猫

### 6.1 養蚕地域における階層分化とその文化的意味

養蚕業や商品作物の発展は、地域社会を経済的に活性化させ、杉の言う「在村文化」を培った。その結果、地域の階層分化が起こったと高橋（1957）は

14) 国立国会図書館蔵

近世における都市-農村・日本-世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——指摘している。図28の例で見れば、持高の少ない農家と多い農家に二極分化している。ただし、このデータの収集者によれば、階層の上昇と下降は同時に起こっており、上昇した農家には養蚕を契機としたものが多いという。

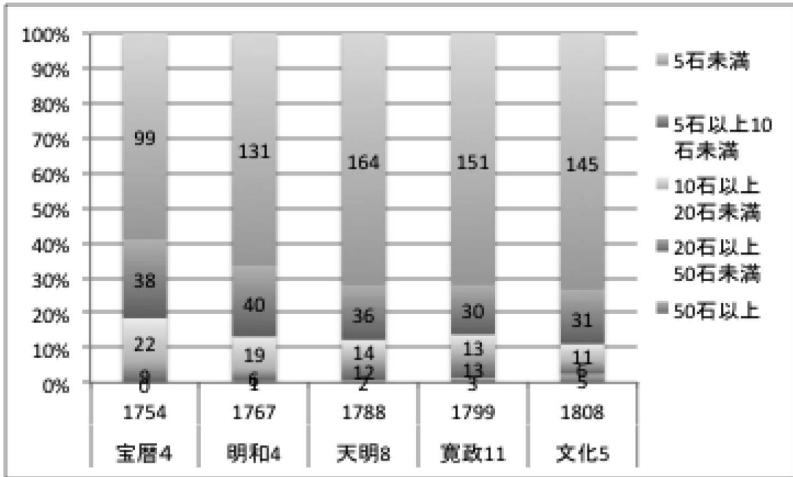


図28 伏黒村農民の持高の歴史の変遷（高橋幸八郎・古島敏雄編，1957，『養蚕業の發達と地主制——福島県伊達郡伏黒村実態調査報告——東京大学社会科学研究所研究報告第一〇集』御茶の水書房,p.124の19表のデータを加工して，遠藤作図）

養蚕を一つの契機とする，農村部における中間層の登場は，農村部に，都市部と比肩するような在村文化を生み出した。江戸期には，「旅する文化人」たちが非常に多いが，彼らは，在村の素封家たちの接待を受け，都市の文化を伝えると共に，在村文化を各地に広める役割も担った。

## 6.2 在村文化と「子供の誕生」

豊かな在村中間層は，それ以前の社会における「小さな大人としての子ども」ではなく，アリエス（図29）]が17～18世紀の西欧社会について指摘したのと同様の，「家族の愛を集め，大事に育てられる」子どもを生み出した。

図30は，遊ぶ子どもたちを描いているが，男女共に碁など，知的な遊戯を

楽しんでいるようである。また、図31に見られるように、子ども向けのさまざまな玩具やあそびももつくり、その中にも猫が姿を見せている。



図29 アリエス『子供の誕生』(1960) 口絵 ヤン・ステーン『聖ニコラ祭』(17C)



図30 遊ぶ子どもたち<sup>15)</sup>

15) 鮮斎永濯, 1881, 『子供遊び画帖』博聞社 (国会図書館蔵)

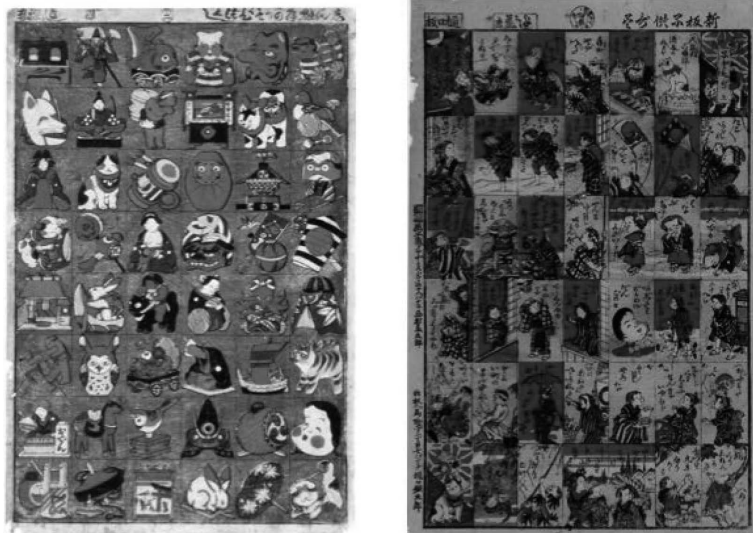


図31 おもちゃ絵 (左:「志ん板手あそびづくし」芳藤, 1858 右:新板子供歌尽) 芳藤)

### 6.3 供養絵額に描かれた「幸福な子どもたち」

彼らの姿は、東北地方を中心に残る「供養絵額」に見ることができる。供養絵額とは、死者の供養のために檀那寺に奉納される絵額である。柳田國男 (p.130) は、「ひとりで茶を飲んでいる処もあり、三人五人と一家団蕊の態を描いた画も多い。後者は海曙で死んだ人たちだといったが、そうでなくとも一度に溜めておいて額にする例もあるという。立派にさえ描いてやれば、よく似ているとって悦ぶものだそうである」と記している。愛する死者が本来ならば楽しむことのできたであろう「幸福な生」の有様を描いて死者の後世を願ったのであろう。

死んだ子どもの供養絵額には、猫と戯れ、玩具（土人形など）で遊ぶ、美しい着物姿の子どもたちが描かれている。そこには、期せずして、養蚕（織物）産業や窯業の発展が、豊かな階層の「愛される子ども」たちを創出し、猫が「カワイイ猫」へと変貌する情景が立ち現れている。

## 6.4 子どもの教育

江戸期、市中では多くの子どもたちが、「寺子屋」による教育を受けた。

菊池寛一郎の『江戸府内絵本往来』（1905）（図32）には、「江戸の児童男  
女共武家町家とも六七歳より文字かくことを習ふに當時幼童筆學の師なるも  
の市中町毎になき所なく此師孫子を預りて仕立ける預り置時間は毎日朝より  
午後までとす弟子の多きは百人餘少なきは五十人に下らず師たる人質素にし  
て而て懇切な、よく孫子を教育」（中編2）する」と書かれている。鈴木春信  
の美人画（図33）にも、手習いをする少女たちの姿が描かれており、女子が  
学ぶことも奨励されることだった。また、「出世双六」（図34）といったおも  
ちゃ絵によって、学問が出世の役に立つと、学問を奨励する風潮もあった。

地方においても、地域による濃淡はあるものの、寺子屋教育はかなり普及  
していた。

こうした教育への熱意により、開国時の日本の識字率は、諸外国に比べて  
高く、「文明開化」に柔軟に適應できる「民度」が十分に培われていたといえる。



図32 「孫子手習ひ初め」  
菊池寛一郎（1905）



図33 鈴木春信 五常「智」  
1767, ポストン美術館蔵



図34 歌川芳綱（江戸末期）  
「寿出世大双六」国会図書館蔵

## 7. 猫とともに準備された日本の「近代」

### 7.1 養蚕錦絵

幕末になると、養蚕に従事する女たちの姿を美しく描き出した錦絵が多く



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——出版されるようになる。養蚕の作業に従事するのが主として女たちであったこと、江戸期の浮世絵では、働く女たちの姿を取りあげるのは一般的であったことを考えれば、当然ともいえるが、年代が下るにつれて、その衣服は華美になっていく。特に明治期に入ると、大名の姫君や、禁裏の高貴な女性たちであるかのように描かれたものが増えていく。

これは、生糸産業を保護育成するために女性たちを養蚕の仕事へとエンカレッジする企図があったのではないだろうか。



図35 養蚕錦絵<sup>16)</sup>

## 7.2 繊維産業の近代化

日本社会が「開国」し、明治体制になると、製糸業は国の殖産興業の大きな柱となった。上に述べたように、江戸期、女性たちのはたらきによって、絹生産は大きく発展していた。江戸末期、政府が製糸業で世界市場に船出しようとしたのは当然であった。

しかし、そのもくろみは欧米諸国との市場競争の中ですぐに躓くこととなった。欧米から最新の技術を導入することが喫緊の課題となった。明治5(1872)年、明治政府は生糸の品質改善・生産向上と、技術指導者育成のため、洋式の繰糸器械を備えた官営の模範器械製糸場を設立した。それが、2014年にユネスコの世界遺産にも登録された富岡製糸場である。政府は各県庁を通

16) 左から、「[蚕飼ひの図] [桑葉をきざむの図] 芳藤・画 藤岡屋・出版 安政4」,「[桑葉を与ふるの図] 同左」,「蚕養草種おろし 桜斎房種・作辻亀・出版」

じて富岡製糸場で製糸の新技術を学ぶ13歳から25歳までの「伝習工女」を募集する。1873年には、全国から556名の伝習工女が集まった。その8割が10代だった。彼女たちには、富岡製糸場で習得した器械製糸の技術を地元を持ち帰り、地元設立される民営の製糸工場で指導的立場に立つことが期待されていた。このときの伝習工女の一人である和田英が書き記した『富岡日記』(1907年記述)には、当時の工女たちの様子が生き活きと描かれている。

こうした紡績工場でも猫が飼われていたこともあったようである。京都帝国大学の野上俊夫は、「或る紡績工場に於いて偶然一匹の猫を飼った所工女たちはその為に非常に慰安を得て能率が大いに増したというような話がある」<sup>17)</sup>と述べている。



図35 富岡製糸場 (2017.5.4 遠藤撮影)

### 7.3 繊維産業の振興

こうした努力の甲斐あって、日本の製糸産業は急速に近代工業化され(表2)。繊維製品は重要な輸出品へと発展していった(表3)。

その立役者の一人が、渋沢栄一(1840-1931)だった。渋沢は、現在の埼

17) 野上俊夫「能率増進の心理学的研究(一~九)」大阪時事新報1920年1月1日-15日(高木裕宜「5S活動の生成と展開」『経営論集』第16巻第1号 2006年 127-143頁における引用による)。



近世における都市-農村・日本-世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
 玉県深谷市内の血洗島村に生まれた。この地域は、南北朝時代には新田氏と足利氏が争った地であり、「猫絵」(5.1節)で知られる新田岩松氏が治めた現在の群馬県太田市と川を挟んで隣接している。

島田(2011)によれば、江戸期の「血洗島を中心とした地域は水田が少なく、経営規模の小さな農家が多いものの、比較的安定した支配構造と交通の便に恵まれ、発展の条件を備えた地域」(p.4)で、「そのような状況を背景に、村内においては江戸中期以降に特定の家による土地や財の集積が進み、その一方で土地保有が一町未満の貧農が大多数を占めるという格差の拡大が進行した(井上潤)。幕末に村の秩序に変化をもたらした主役の一家が急速に成長して村内の中心に躍り出た。その家が渋沢栄一の生家であった」(p.4)。

表2 生糸産業の器械化<sup>18)</sup>

年	器		機		織		糸		産		額		百		分		
	台	数	台	数	台	数	台	数	千	円	千	円	分	比	分	比	
大正十四年	1,700	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000
大正三年	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000
明治三十九年	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000
明治三十四年	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000
明治三十七年平均	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000
明治三十七年平均	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000	100	1,000

表3 輸出重要品としての発展持続商品 (単位:千円)<sup>19)</sup>

種別	明治20	明治25	明治35	明治40	明治45	大正6	大正11	昭和2
生糸	19280	36270	76859	116889	150321	358155	670047	742266
絹織物	190	722	6938	18706	25761	127458	222052	383837
絹織物	321	3757	27399	31754	30101	62858	107928	139615
メリヤス製品	10	74	498	4333	8985	26265	17667	29057
帽子	1	17	149	678	4842	5982	5556	9409
硝子及陶製品	19	130	839	1831	3068	14433	10309	16631
石灰	2338	4572	17270	19053	20285	26454	23514	25508
玩具	---	---	386	953	1898	8410	7414	10521
鉄製品	23	45	353	1840	674	16315	1322	12060
毒芥酸	26	56	464	338	1590	1594	3323	4898
精糖	---	---	81	2591	8477	26151	19092	28917
セメント	---	---	308	939	238	2678	3907	7122
ビール	---	---	524	1281	724	4869	3358	4246
以上小計	22208	45652	132068	201185	256964	678622	1095489	1414087
輸出合計	52408	91103	268303	432413	526982	1603905	1637452	1992317
輸出合計を100%として小計の割合	42.38	50.11	51.13	46.52	48.76	42.33	66.96	70.98
玩具の輸出合計にしめる割合(%)			0.15	0.22	0.36	0.52	0.45	0.53

18) 出典：高橋亀吉，1928，『日本資本主義発展史』日本評論社，p.117

19) 出典：高橋亀吉，1929，『明治大正産業発達史』，改造社，p.396

渋沢家はまさに、5章で述べた「在村養蚕技術」の発展をになった「家」の一つだったのである。渋沢家は農家ではあったが、流通に関わる商家の性格ももっていた。そのため、渋沢は合理主義的な考え方も備えていた。

渋沢は長じて幕臣となり、徳川昭武に随行してパリ万博、ヨーロッパ各国の視察を行った。明治に入ると、大蔵省に入省するが、まもなく実業界に転じ、第一国立銀行頭取など、膨大な数の企業の設立、経営に携わった。

富岡製糸場の設立にあたっては、渋沢は富岡系市場設置主任に任じられ、従兄弟の尾高惇忠らとともに、尽力した。富岡製糸場の初代場長は尾高惇忠である。近世から近代へ、養蚕業は、地下を流れる水脈のように強い連続性をもって「日本」を近代国家へと導いたのである。

#### 7.4 文化輸出と猫

幕末から、日本の生糸製品は海外に向けて大量に輸出された。そのとき、包み紙として、しばしば「猫絵」が使われた。現在埼玉県にはこの絵は五点程しか存在しないが、その消失した理由としては、幕末から明治にかけて蚕種の輸出の際、日本の繭蚕種製造家が蚕種の魚除けにこの絵を添付して輸出したため、フランス、イタリアーではその理由がわからず、日本人は動物愛護家であるという評判を得たというエピソードがある。『関東の民間信仰』p.244-5。そのために、海外では、「日本人は大変な猫好きらしい」との風説があったという（日向野、1973）。

同様に、日本では安っぽい大衆商品として扱われていた浮世絵も、包み紙やパッキングとして使われ、それが海外の画商の目にとまったのが、浮世絵がヨーロッパで大ブームを起こすきっかけとなったという。

浮世絵や万博などによって引き起こされた芸術運動であるジャポニズムは、周知のように、ゴッホ、ゴーギャン、ルノワール、マネなど印象派の人びとに多くの影響を与えた。アール・ヌーヴォー、アール・デコなどのその後の芸術運動にも、ジャポニズムは大きく関わっていると言われる。とくに、ロートレックやミュシャ、ビアズリー、スタンランなどにその傾向が顕著である。

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
やがて、「ジャポニズム」は（世界情勢の変動とも相まって）あからさまなかたちでは表現されなくなる。しかし、その後の芸術潮流にも、その影響は伏水流のように見え隠れしている。



図36 エドガー・アラン・ポー『黒猫』挿絵

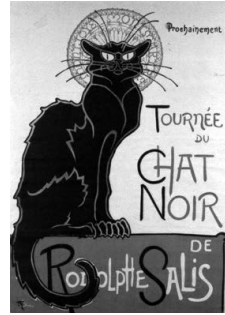


図37 スタンラン『黒猫』ポスター

## 7.5 近代化の過程に現れる猫たち——日本と欧米の葛藤

江戸末期、欧米列強によるグローバル化の波のなかで、日本社会は「近代化」という変容を迫られることとなった。それは大きな荒波であったが、何とか転換を成し遂げられたのは、一方では、いち早く世界の輸出国となった繊維産業の基盤がすでに形成されていたからであり、他方では、「ジャポニズム」とよばれ世界的に流行した江戸期の文化産業の魅力でもあった。そして何より、「子ども」の教育に重きを置く「在村文化」の力が、日本近代化に大きな力を発揮する企業家たち（例えば、先に挙げた渋沢栄一など）と近代中間層を準備したといえよう。そして、変化する社会と格闘しつつ、新たな文化を生み出した芸術家たちも、在村の中間層を出自とするものが多かった。

このプロセスに、「猫」たちは装いを変えつつ、陰に陽に姿を見せる。ここでは、「近代欧風文化」の影響と既存の日本文化の流れとが、混淆し、また葛藤するさまが現れている。

たとえば、夏目漱石の『吾輩は猫である』（1905-6、俳誌『ホトトギス』に掲載）は、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとうと見当がつかぬ。」

という印象的な書き出しで始まる。猫の冷めた視点から同時代の人びとの生活を諧謔的に語る。ブルーストやジョイスら“意識の流れ派”の源流とも評される『トリストラム・シャンディ』<sup>20)</sup>をはじめ、ドイツの幻想作家E.T.A.ホフマンの長編小説『牡猫ムルの人生観』<sup>21)</sup>などの影響を指摘する研究者もいる。ただし『我が輩』の文章はむしろ江戸期の戯作調であり、地口なども多用されている。4章でもいくつかの例を挙げているように、江戸期、猫を主人公とした、あるいは猫を語り手とした読み物はいくつも存在している。装丁(図38)も、ヨーロッパ的な猫の表現と、日本の家猫の表現とが混在している。この混淆こそが、当時の「近代化」における異国からの知的刺激と、それに対する葛藤と自負の表現であったともいえる。



図38 夏目漱石, 1905-7, 『吾輩ハ猫デアル. 上』, 大倉書店 口絵 国立国会図書館蔵

詩集『青猫』(1923), 小説『猫町』(1935)などで知られる詩人・萩原朔太郎(1886-1942)は、前橋市の開業医の息子として生まれた。彼は、大正時代に近代詩の新しい地平を拓き「日本近代詩の父」と称される。「ふらん

20) The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman. イギリスの小説家ローレンス・スターンの未完の小説(1759-1767)。夏目漱石は、「トリストラム、シャンデー」という紹介文を『江湖文学』(江湖文学社)第4号(1897(明治30)年3月5日発行)に掲載している。(夏目金之助『漱石全集 第十三巻』岩波書店, 1995(平成7)年2月22日初版第1刷)所収。電子版: <http://www1.gifu-u.ac.jp/~masaru/soseki/shandy0.htm>

21) Lebensansichten des Katers Murr 1819-1821

近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——  
 すへ行きたしと思へども ふらんすはあまりに遠し」（「旅上」『叙情小曲集』  
 (1925)）などの詩句からも、西欧近代や都市文化への憧憬がうかがわれる。  
 しかし、同郷の詩人・萩原恭二朗<sup>22)</sup>は、同じ『叙情小曲集』の跋に「生活的  
 の苦は、藝術的の怒りとなつて現はれた」と論じている。また、代表作の一  
 つである「青猫」の内容も、よく玩味してみれば、「雀」「夢を夢見て」といっ  
 た詩句のイメージは、鎌倉・室町期以来、日本で「猫」とともに描かれてき  
 た「雀」「胡蝶の夢」を想起させる。



圖之猫青

図39 「青猫之圖」 萩原朔太郎  
 詩集『青猫』（1923年 新潮社刊）

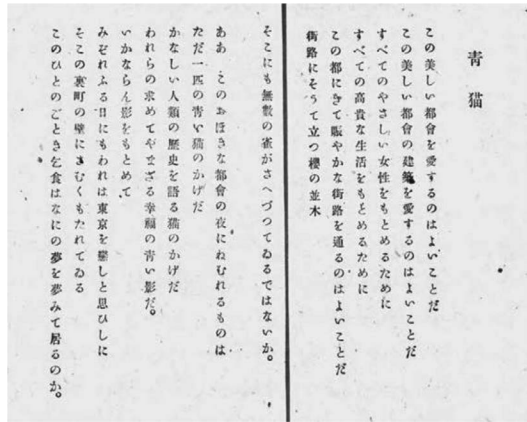


図40 「青猫」（『萩原朔太郎詩集，第2』小学館，  
 1945-6, p.34-5）

萩原とはほぼ同世代の詩人、北原白秋（1885-1942）もまた、福岡県柳川市の裕福な酒造家に生まれた。彼の『おもひで：抒情小曲集』（1911）にも、猫をテーマにしたものがいくつも見られる（図41）。

大正ロマンを代表する画家であり詩人でもある竹久夢二（1884-1934）は、岡山の代々の酒造家に生まれた。彼もまた、さまざまな猫の絵で知られている

22) 1899-1938 現在の前橋市の農家に生まれる。近隣には養蚕農家が多く、貧しい農民たちへの共感が詩作につながっている。朔太郎と縁戚関係はないが、10代の頃から、朔太郎と交友関係を持った。



図41 『抒情小曲集』(北原白秋)の猫の挿画

(図42-4). とくに「黒船屋」(1919)は甘えかかる黒猫を抱く華奢ではかなげな女性の姿態が淡い官能と哀愁とがない交ぜになった魅力を放っている. この絵は, キース・ヴァン・ドンゲン<sup>23)</sup>の「猫を抱く女」(1908, ミルウォーキー美



図 竹久夢二「出世猫」挿画<sup>25)</sup>



図 竹久夢二「女十題 第六 黒猫」<sup>26)</sup>



図 竹久夢二「黒船屋」<sup>24)</sup>

23) 1877-1968 フォーディズム, エコール・ド・パリの画家の一人

24) 1919年作

25) 山崎光子, 松村武雄 訳・竹久夢二画, 1929, 「猫出世」『世界童話集. 下』アルス, p.108 国会図書館蔵

26) 竹久夢二, 1937-8, 『女十題. [6]』加藤潤二 国会図書館蔵



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——術館)にインスパイアされたものとも言われている。ただ、すでに4.4節にも述べたように、江戸期の浮世絵には、猫と女を描いたものが無数にある。「黒船屋」に歌麿の影響を指摘する研究者もいる。ヴァン・ドンゲンが属したフォーディズム運動は、ゴーギャンやゴッホ、新印象派、セザンヌらの影響を受けているが、彼らが浮世絵日本趣味に強く惹かれていたことも事実である。伊藤信博(2009)によれば、パリ国立図書館東洋写本室には、18-19世紀に日本から購入された多くの絵や文献が存在する。異文化接触は相互に影響を与え合っているのである。

宮澤賢治(1896-1933)は、岩手の素封家の長男として生まれた。具体的に猫が現れるわけではないにもかかわらず、独特の恐怖を感じさせる。宮澤賢治の童話「注文の多い料理店」は、「日本」という範囲を超えた汎宇宙的な感覚に満ちた作品である。賢治の世界観と西欧近代との関わりについては、遠藤(2013)を参照していただきたいが、挿画(図45)にも現れているヨーロッパ的な状況設定にもかかわらず、筆者はその物語の中に、『徒然草』の「猫また」のプロットが見え隠れしているように感じる。詳細は別稿に譲るが、この作品もまた、猫を媒介として、西欧近代と日本近世が反響し合うものといえるのである。



図45 宮澤賢治, 1941, 「注文の多い料理店」『グスコーブドリの伝記』羽田書店,p.100-101国立国会図書館蔵

## 8. おわりに――江戸期の猫ブームと技術

他愛もない大衆の流行のように見える現象も、しばしば、大きな社会変動の表徴であり、また動因でもある。

本稿では、江戸末期に浮上した「猫ブーム」を、日本の社会／産業技術の近代化の再帰的運動の表れとして、論じた。

本稿で考察してきた猫文化の変容の概要を図46に示す。

明治大正昭和の文化シーンで、「猫」に関する想像力は、前の時代を引き継ぎつつ、新たな表情を獲得していった。現代の「猫」ブームは、また更に新たな時代の到来を告げているのかもしれない。

なお、幕末「化け猫ブーム」の底に潜む神話構造およびグローバルゼーションとの関係については、紙数の都合上本稿では触れなかった。稿を改めて、詳細に論じることとする。

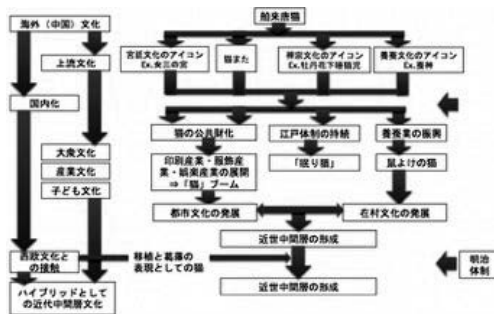


図46 「猫文化」の変容

謝辞：本研究は、学習院大学東洋文化研究所一般研究プロジェクト「東日本大震災に対する価値観に関する実証的研究」（2015～2016年）の助成を受けたものである。

本研究は、科学研究費助成・基盤（C）「東日本大震災における社会関係資本



近世における都市・農村・日本・世界の文化的交差——〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム——を  
活用した復興政策についての研究」(2016～2018年)の助成を受けたものである。

### 【参考文献】

- Ariès, p., 1960, *L'Enfant et la Vie familiale sous l' Ancien Regime* (杉山光信・他訳, 1980 『〈子供〉の誕生』みすず書房)
- 遠藤薫 (編著), 2008, 『グローバリゼーションと文化変容』世界思想社
- 遠藤薫, 2009, 『聖なる消費とグローバリゼーション』勁草書房
- 遠藤薫, 2010, 『日本近世における聖なる熱狂と社会変動』勁草書房
- 遠藤薫 (編著), 2012, 『グローバリゼーションと都市変容』世界思想社
- 遠藤薫, 2013, 『廃墟で歌う天使—ペンヤミン『複製技術時代の芸術作品』を読み直す』現代書館
- 遠藤薫, 2015, 「招き猫とは何か——近世都市伝説と始原神, およびその現代的意義」(文化資源学会研究発表大会2015 報告, 2015.7. 11)
- 遠藤薫, 2016, 「なぜいま, カワイイ」が人びとを引きつけるのか?」『〈知の統合〉シリーズ カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』, 東京電機大学出版局
- 遠藤薫, 2016, 「カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係——江戸期の猫ブームを例として」感性工学会「かわいい人工物」研究部会・〈知の統合〉シリーズ発刊記念公開シンポジウム (2016.5.21 芝浦工業大学)
- 遠藤薫, 2017, 「「はたらく」ということ—「強い男(女)という妖怪」に抗して」『学術の動向』2017年8月号
- 藤井享子, 2010, 「江戸前期小袖の猫文様について—『源氏物語』の唐猫の近世的展開」河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』竹林舎 p.262-284
- 藤原重雄, 2014, 『史料としての猫絵』山川出版社
- 日向野徳久・他, 1973, 『関東の民間信仰』明玄書房
- 市古貞次・校注, 1958, 『日本古典文学大系〈第38〉御伽草子』岩波書店
- 今村与志雄, 1986, 『猫談義 今と昔』東方書店

学習院大学 法学会雑誌 53巻1号 (2017.9)

伊藤克江, 2006, 「養蚕錦絵に見られる猫」『浮世絵芸術』2006年号,p.43-9

伊藤信博, 2009, 「パリ国立図書館東洋写本室資料古書目録を通じた異文化交流の諸相」『言語文化論集』30(2) (名古屋大学)

伊藤智夫, 1992, 『絹 I・II』法政大学出版局

黒田日出男, 『歴史としての御伽草子』

河添房江, 2008, 『光源氏が愛した王朝ブランド品』角川選書

野村 純一 (著), 野村純一著作集編集委員会 (編集), 『昔話の来た道・アジアの口承文芸 (野村純一著作集 第五巻)』, 2011/9/20

布目順郎, 1979, 『養蚕の起源と古代絹』雄山閣

落合延孝, 1996, 『猫絵の殿様——領主のフォークロア』吉川弘文館

奥村正二, 1973, 『小判・生糸・和鉄』岩波新書

小野武雄, 1983, 『江戸時代風俗図誌 遊女と廓の図誌』展望社

佐々木潤之介・編, 1983, 『技術の社会史2——在来技術の発展と近世社会』有斐閣

島田昌和, 2011, 『洪沢栄一社会企業家の先駆者』岩波新書

杉仁, 2001, 『近世の地域と在村文化』吉川弘文館

上田穰, 2003, 「歴史家の見た御伽草子『猫のさうし』と禁制」『奈良県立大学研究季報 14 (2・3)』, 9-18

柳田國男, 1928, 「雪国の春」『柳田國男全集 2』筑摩書房